

ふるさと御所 歴史探訪

御所について

御所市内には、中世の郷土名と現在の大字名等が一致している所があります。『南葛城郡誌』の「本郡の郷土一覽」には、御所氏以外に左記の郷土の名前があります。

半田（吐田）但馬守（半田とは北名柄、南は佐田迄をいふ」とあります）、名柄主馬薫数、小林右衛門殿光之、佐味兵庫数豊、俱戸羅（櫛羅）監物光資、榎原周防守、十楚（十三）勘右衛門、本馬数馬、戸氣（戸毛）安房、松本助六、柳原勝助

この「歴史探訪」は、平成25年1月号に「おかげ参り」について書き、その後、地方文書に基づいていろいろ書きましたが、今回で終わりにします。最後に、御所について書くことにします。

御所という地名が確認できる最も古いものは、興福寺の僧英俊が書き残した『多聞院日記』の文禄12年（1569）7月17日条であり、「御所庄」となっています。また、中世に御所刑部秀全（姓名の読み不明）という郷土がいたことが複数の史料で確認できます。住んでいた人物の氏名が集落名になったのか、または、その逆かはわかりません。

国土地理院の2万5千分の1の地形図に書かれている地名を集めた『新日本地名索引』（アポック社、1993）には、16ヶ所の「御所」という地名があります。その中で「ゴセ」と読むのは和歌山県かつらぎ町御所と当市だけで、他の所は「ゴシヨ」と読むようです。以前、かつらぎ町御所の区長さんに聞き取りをしました。「江戸時代以前は『ゴシヨ』であったが、明治維新後、恐ろしいので奈良県の『ゴセ』を真似て変更した」ということでした。

御所という地名の由来についてよく質問を受けます。いくつかの説がありますが、信頼できるものはないようです。ただ、御所という郷土が住んでいたことは確かで、この人の呼び名が「ゴセ」であった可能性が考えられます。

写真1



『西国三十三所名所図会』（嘉永6年（1853）刊）の緋の説明（写真1）

には「五所」となっています。しかし、同書の鴨都波神社の説明等は、「御所村」と書かれています。当時は、文字にこだわらなかつたようです。『大和名所図会』（寛政3年（1791）刊）も「御所村」となっていますが、寛保3年（1743）以降は、御所町であったことは明らかで、詳しくは拙著『近世後期大和国御所町に関する研究』をご参照ください。

池田末則氏の「御所市の命名をめぐって」（『地名学研究』18号、1961）によると、昭和33年（1958）に葛村、葛上村、大正村、御所町が合併することになったとき、「御所市」にするか「葛城市」にするかが、大きな問題になったようです。結論がでない状況で、当時の副知事の斡旋で「葛

城は将来、南北葛城の合併を機に名付ける」ということで「御所市」に決定したそうです（当時は、南葛城郡と北葛城郡がありました）。

最後に図1に示した市章について説明します。

昭和55年に発行された「わたしたちの御所市」に書かれている「由来」の要約は左記の通りです。なお、「古」を字母とする「こ」の変体仮名を写真2に示します。



図1

「ゴセ」の「こ」の字を図案化したもので昭和33年に制定されました。円い太線は円満なる和、中央は鋭くたくましく発展する姿を表わしています。

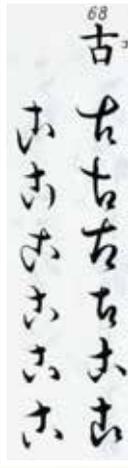


写真2

今回で「歴史探訪」は終わりますが、今までのことをご質問等がありましたら、お気軽にお申し越してください。次号から「ふるさと御所 文芸探訪」として書かせていただくことにします。引き続き、よろしくお願いたします。

（文責 中井陽二）